東京大学宗教学年報 XXXIX（2022 年）196-212 頁

折口学の評価
―没後 50 年以後を中心に―

中條　真之介*

1. はじめに

本稿の目的は，折口信夫（1887-1953）の学問体系である「折口学」が近年において研究史上でどのように再検討され，評価されているかを記述することである。折口研究は折口の没年である 1953 年から現在にかけての約 70 年にわたってなされてきたが，ここでは近年の動向を重点的に論じるため没後 50 年にあたる 2003 年以後を中心に見ることにしたい（時期設定の妥当性については 1-2 にて説明する）(1)。

折口信夫は，一般に柳田國男（1875-1962）と双璧をなす民俗学の祖として知られる人物である。その活動範囲は多岐にわたり，民俗学者に加えて国文学者・国語学者・神道学者・歌人・小説家としての顔を併せもつ。折口は 1887 年に大阪府西成郡木津村に生まれ，1910 年に國學院大学を卒業した後，文学研究と短歌創作に情熱を注ぐ中で柳田を知り，1915 年彼が主宰する雑誌『郷土研究』に「髯籠の話」が掲載されるとともに民俗学へと傾倒し始めた。また 1919 年に國學院大学で，1923 年には慶應義塾大学において職を得ることになり，没年まで教鞭を執り続けた。折口は足繁く旅へ出ており，その際に培った「実感」が彼の学問を支える基盤となっている。特に 1921 年と 1923 年に民俗採訪のために行った沖縄旅行では大きな刺激を受け，その影響が主著『古代研究』をはじめとする後の作品に及んでいる。以上が折口についての概略である。宗教学の分野では「まれびと」や「貴種流離譚」等のキーワードで知られる反面，J・G・フレイザーやM・エリアーデ，柳田國男同様に，古典とされつつも現在では主に実証的観点から直接引用することが敬遠されがちな人物である。

なお，本稿は宗教学の立場から折口信夫を論じるという体裁をとっているため，必ずしも折口研究全体についてカバーしていないことについて，予め断りを入れておく。特に，宗教学周辺で大きな研究成果を上げている安藤礼二や斎藤英喜の議論の比重が大きくなる一方で，国文学・民俗学方面の研究については主なものに触れる程度となる。

本稿の構成を手短にまとめると次のようになる。まず，第 1 章では折口信夫と折口学について概略を示す。第 2 章では折口学批判と「折口名彙」に注目しながら，2003 年以前の研究の流れを簡単にまとめる。そして，これに続く第 3・4 章にて以後の研究動向に焦点を当て，第 3 章では折口学の妥当性について検証を行った研究成果を，第 4 章では近年において折口学へ関心を寄せている議論の展開を記述する。最後に，第 5 章にて総括を行う。

1-1　折口信夫の学問

折口信夫の学問は類稀なる彼自身の個性と密接に結びついたものであり，「折口学」の名

* 東京大学大学院修士課程

が冠されている。それは国文学・民俗学・芸能史等複数の分野を横断することを特徴とするが，主著のタイトルが象徴するようにすべてが「古代研究」というテーマに帰着する(2)。

折口学の体系の基盤をなすものは，西村享・高梨一美の指摘によれば旅を通して培った経験に基づく「実感」，そして膨大な読書量に裏打ちされた言葉に対する深い関心と鋭い感受性の 2 つであるという(3)。また，『古代研究』の「追ひ書き」で述べている通り，折口は事象を比較する際に類似点を直感する「類化性能」に優れており，一見無関係な事象を同じ論理で説明する(4)。加えて，「まれびと」や「貴種流離譚」といった折口独自の語法もよく知られるが，これについては後の 2-2 で触れる。

さらに，論の展開方法も重要である。折口は著述にて基本的に注釈や先行研究を示さず，仮説をひたすら提示するという形式をとっており，議論が完成を見ることなく様々な方向へ拡散しながら展開する。この様式の中に折口学の魅力と危険，そして晦渋さが存在する。

1-2　本稿の時代設定について

折口信夫については 1953 年の没時より後に膨大な研究がなされているが，ここでは冒頭に示した通り没後 50 年にあたる 2003 年以後を中心に見ることにしたい。この時代設定の妥当性については，以下の事実によって担保されるといえよう。

第一に，折口信夫は 1887 年に誕生し 1953 年に没したが，10 年周期で生没年を記念する雑誌の特集が組まれてきた。このうち没後 50 周年の 2003 年はとりわけ重要であり，複数の雑誌で特集が掲載されシンポジウムも数多く行われている(5)。特に折口の母校である國學院大学では「三矢重松博士八十年祭折口信夫博士五十年祭」が開催され，その記念に折口を専門とする研究者らによる特別講座「折口信夫・釋迢空 その人と学問」が行われた(6)。

第二に，2003 年に先立つ 1995-2002 年にかけて中央公論新社から全 40 巻に及ぶ新版『折口信夫全集』（以下，「新全集」）が刊行された。折口信夫の全集はこれ以前には同社より，1954-59 年と 1965-68 年に旧版『折口信夫全集』（全 32 巻，以下，「旧全集」），1970-74 年に『折口信夫全集 ノート編』（全 19 巻），1975-76 年に旧全集の文庫版，1987-88 年に『折口信夫全集 ノート編 追補編』（全 5 巻）が発刊されていた。新全集では 3 冊の別巻をはじめとして旧全集には収録されなかった作品も収録されており，以後の研究の発展に寄与することとなった。また，新全集刊行に並行して 2000 年に有山大五・石内徹・馬渡憲三郎編『迢空・折口信夫事典』が出版されたことも研究史上のメルクマールとして重要である(7)。

上記の 2 点から，折口学・折口研究にとって折口没後 50 周年にあたる 2003 年が決定的に重要な年度であり，これを基準として研究史を考えることが適切であると理解できよう。

2. 折口研究の過去：折口学への批判と「折口名彙」

近年の折口研究の背景には，折口学批判への応答，そして「折口名彙」の枠組みからの脱却という 2 つの大きな目的意識がある。以下の節 2-1，2-2 ではそれぞれについて確認し，続く 2-3 ではこれを踏まえつつ本稿が対象とする 2003 年以降へと続く研究の流れを追う。

2-1　折口学への批判

折口信夫の学問的業績は賛否が大きく分かれることで知られている。「好きか，嫌いか，その中間がないのが，折口信夫の著作だ」という万葉集研究者・上野誠の言葉に端的に表されているように，折口学はその特異な性質とどのように向き合うかによって評価が大きく別れる(8)。折口門下の池田彌三郎も指摘している通り，「折口学は，その全体をまず認めてかかるか，全体を認めないか，といったていのもの」だとされるのである(9)。

折口学に対する批判は本人の生前より数多くなされているが，1972 年に刊行された池田彌三郎『私説 折口信夫』におけるまとめが現在までの批判も含めてこれらを概括したものといえよう(10)。そこでは，①演繹的な論証方法につき根拠が薄弱であり実証性に欠ける，②論理が飛躍していて科学的ではない，③直観による詩人の空想である，主にこの 3 点が批判者にとって問題視されるという。特に，折口学は「実感」に即して構築されているため，良くも悪くも主観性に大きく依拠しており客観性が担保されていないという性質をもつ(11)。

上記のような批判に対しては，折口門下はじめとする折口研究者が反論を試みている。その対応方法は，およそ以下の 3 種類に分けられるだろう。

まず 1 つ目は，折口信夫が生きた当時の社会的状況を考えると折口学の問題はやむを得ないものだとするものである。例えば上野誠によれば，当時は仮説的な解釈装置の発明が喫緊の課題であり，その検証や実証は読者や後継者に託さざるを得なかったという(12)。

2 つ目は，批判は的を射たものではないとするものであり，特に折口学の全体を俯瞰する必要性が説かれることが多い。これについては池田彌三郎本人も先の批判に対して，折口学の「飛躍」は学の体系全体の中に位置づけてみた場合決して飛躍ではないと応じている (13)。また，詩人・評論家の富岡多惠子は折口学に関して部分的な批評はなされても，折口信夫という人自身を含めて全体を読み込むところまでは届いていないと指摘している(14)。さらに，折口学とは共時的な体系であり通時的批判とは噛み合わない，実証の視点では飛躍や断絶があるが構造的には一貫性がある，といった見解もある(15)。

最後に 3 つ目の対応としては，実証によってその正しさが示される場合や，同時代的状況に基づいて理解することで妥当性が再認識される場合が多くあり，それについて検証を行うという形で説明を行うものがある。こうした折口学の吟味が近年の折口研究における一大潮流をなしている。これは本稿の中心的な論点となるため，次の第 3 章にて詳述する。

2-2 「折口名彙」

2003 年までの折口研究は，門下で慶應義塾大学にて教鞭を執った先述の池田彌三郎が 1972 年に提唱した，「折口名彙」という枠組みに規定されてきた部分が大きい。この「折口名彙」とは，池田が『私説 折口信夫』において「まれびと」や「貴種流離譚」といった折口による独特の用語法を表すために設定した概念である。本書にて池田はさらに，この名彙の蒐集と解説をもとに折口学の整理を行っていくべきであるとの旨を主張した(16)。

池田による提唱の後，折口研究はこの「折口名彙」に基づいて取り組まれることとなり，大きな前進を見せた。それを象徴するものとしては，折口生誕 100 周年に際して 1988 年に刊行された西村享編『折口信夫事典』がある(17)。本書は折口学の網羅的な解説を行ったいわば折口研究のバイブルだが，編集方針として「「折口名彙解説」を主軸とし，論文・作品等

個々については，その全部の書誌と，主要なものの要点を注記するにとどめて，側面から補うという形をとっ」ており，全体の半分以上を「折口名彙」の解説に割いている(18)。

ところで，このように「折口名彙」に依拠しながら研究が進められることに関しては，折口門下の学統を継ぐ研究者からも批判がなされている。例えば，近代文学研究の立場から折口のテクストを研究している松本博明は，研究を狭い枠組みに閉じ込めてしまうという危険性を示唆している(19)。また，「折口名彙」の中には手垢のついた概念となるにつれて，実態以上に重要なものとして見られているものがあるとの指摘も存在する(20)。

以上を鑑みるに，現在の研究においては「折口名彙」に基づく研究成果を踏まえつつも，その枠組みを相対化することが求められているといえよう。

2-3　2003 年までの折口研究

折口信夫は共同生活のエピソードでも知られるように，「折口門下」とも称される弟子たちと密接に関わり合い教育をほどこした。このような経緯もあり，折口研究は門下の国文学者・民俗学者によって始められ，その影響が今の研究の枠組みを形作っている。

折口が出身校の國學院大学と慶應義塾大学で教鞭を執ったことから，門下の研究者には両大学の出身者が多い。とりわけ，國學院大学の日本文学科と慶應義塾大学の国文学専攻が折口の学統を引き継いでおり折口研究の拠点としての役割を果たしている。また，國學院大学には折口没後に設立された折口博士記念古代研究所があるが，自筆原稿や所蔵書籍をはじめとした膨大な資料が残されており，現在まで継続的に保存・収集が進められている(21)。

上記に関連して，折口研究には國學院大学・慶應義塾大学出身の研究者とそうでない者の間で大きく「内部／外部」という線引きが存在する，という見方がある(22)。これに従うならば，概して「内部」ではこれまでの折口研究の枠組みの中から研究を進めていくのに対して，「外部」では既存の研究状況に捉われない視点から議論を行う傾向があると考えられる。

また，通時的な研究の流れとしては上野誠によれば，「今日の折口信夫研究は，門弟による顕彰の時代（第一世代），方法論の深化をめざした発展継承の時代（第二世代）から，第三世代に主力が移りつつある。第三世代も多士済々だ」という(23)。このうち，主に第三世代が 2003 年以後の研究を牽引している。特に，現在は折口の直弟子が徐々に鬼籍に入りつつある中で，これまでにない新たな観点からの折口研究が模索されているといえよう(24)。

3.　現在の折口研究における焦点：折口学の検証

先の 2-1 で論じたように，現在の折口研究の中心の 1 つは折口学の検証にある。各研究は大きく見て，以下の 4 つの特徴のいずれかを含んでいるだろう。第一に，実証的方法に基づいて折口学の正しさを確かめること。第二に，折口学の成立・起源を問うこと。第三に，折口学を同時代的状況の中で捉えること。第四に，これまで繋がりが意識されてこなかった他分野から折口学を捉え直すこと。このうち第一の特徴は折口学の内容を点検するものであるのに対して，残りの方法は「詩人の空想」とも評される折口学の背後に横たわる直感の淵源を探る役割を果たす。以下では，各特徴に大きく関わる研究を順次見ることにしたい。

3-1　特徴①：折口学の実証

折口学を検証する上で何よりも欠かせないことは，その内容を現在の研究水準に基づいて実証的に確かめる作業であろう。これは，折口学の諸概念の再検討にも繋がっている(25)。

このような研究手法をとっている主な研究者が，民俗学的アプローチをとる伊藤好英や保坂達雄，そして上代文学を専門とする辰巳正明である。伊藤は，折口学が韓国をはじめとするアジアの民俗に対してどの程度有効であるかを検証しつつ，折口学の内容を「比較民俗学（民俗学）」という広範な文脈から読み解くことを試みている(26)。保坂は，沖縄のシャーマニズムについての民俗調査をもとに信仰を起源とした神話の生成過程を追究しながら，これと並行する形で折口学の形成過程を問うている(27)。辰巳は，折口発生論への徹底した注釈的作業の必要性を説いており，上代文学研究の立場から折口学に対して中国等古代アジアの歴史・思想と照合することで検証を行っている(28)。概して，近年ではアジアという広がりの中で折口学が読み直されていることが確認できるだろう。

ところで先の 2-1 でも触れたが，そもそも「発生」を軸にした折口学には実証との相性が悪いという問題がある。この点に関して伊藤は，折口の「古代」が根元的な力の存在する「歴史の外なる」場所であるとし，これを「民俗学の場所」と名付けている(29)。

このような折口学の特殊性を鑑みた場合，実証によって確かめるのとは異なる観点から妥当性を検証する方法が必要となる。そのために有効な方針の 1 つが，折口学の成立を問うことである。これによって良くも悪くも「独創的」と称される折口学の由来が示され，説得力をもつ説明が可能となる。まずは，学生時代の若かりし頃の折口に焦点を当ててみよう。

3-2　特徴②：柳田國男との出会い以前への注目

柳田國男との出会いが折口学の形成に最も大きな影響を与えたことは，『古代研究』の「追ひ書き」でも触れられている通りよく知られている(30)。これに関して保坂達雄は 2006 年の論文「新しい折口信夫へ」にて，折口学の成立についてはすでに多方面から論じ尽くされているが，同時代的観点から学説形成を問うたものは少ないと述べ，柳田と出会う以前の時期に関する考察を行っている(31)。

近年の研究では保坂に限らず，柳田國男以前に着目しながら折口の学問形成を考える議論が数多く出されている。これまで考察がなされなかったのは，安藤礼二も指摘する通り，折口自身が大学時代に関してほとんど沈黙していることによるところが大きい(32)。

学生時代の折口への注目は，折口信夫・折口学に纏わり付いてきたこれまでのステレオタイプを掘り崩すことに寄与している。すなわち，「折口信夫は柳田國男から決定的な影響を受け，この出会いを起点として彼と共に民俗学という学問分野を開拓した」，というイメージが払拭されつつあるのである。本節では折口学の形成に関する主要な研究に触れたい。

3-2-1　新仏教家・藤無染と一元論哲学

近年の研究で，若き折口信夫に決定的な影響を与えたとされる人物の実像が明らかになりつつある。それは，上京中の折口と同棲していた新仏教家・藤無染（1878-1909）である。

藤無染については，折口の著作中では「自撰年譜」に記述が残るのみで，その存在は久しく謎とされており注目を浴びてこなかった。そんな無染が重要人物として浮上する契機と

なったのが，綿密な資料探索に基づいて若き折口と無染との交流を明らかにした，富岡多惠子による 2000 年の著書『釋迢空ノート』である(33)。無染の思想や彼と折口との関係については，安藤礼二，木村純二，保坂達雄らによって議論が深められることとなった(34)。

藤無染から折口が受けた影響とは何か。安藤は無染が 1905 年に著した，仏教とキリスト教が根本的に同一であるという「仏耶一元論」を説く『英和対訳 二聖の福音』から遡及し，無染の執筆動機となった「仏教と基督教」の著者ポール・ケーラス（1852-1919），さらにケーラスと交友があったエルンスト・マッハ（1838-1916）の「感覚一元論」に折口との繋がりを見ている(35)。一元論思想に関連する思想家としては，かねてより D・S・メレシュコフスキーや岩野泡鳴の影響が指摘されていたが，安藤はここからさらに無染を介して，折口学の淵源を仏教とキリスト教を一元的に理解する新仏教，そしてマッハの「感覚一元論」という近代の哲学思想にまで押し広げたのである。

また，無染以外に学生時代の折口に影響を与えた宗教団体・人物として，安藤は神道結社「神風会」やそこに参加した本荘幽蘭についてもその重要性を指摘している(36)。

3-2-2　言語学

『古代研究』の「追ひ書き」でも触れられている通り，折口信夫は自身の学問の出発点を言語研究に置いている(37)。大学時代には金沢庄三郎（1872-1967）から朝鮮語の，金田一京助（1882-1971）からアイヌ語の教えを受けており，そこで言語学の素養を培っていた。近年の折口研究では，柳田の民俗学に出会う以前に受けた言語学の影響も関心を集めている。

言語学に関する研究に先鞭をつけたのが，先述の「新しい折口信夫へ」における保坂達雄の議論である。保坂によれば，言語への傾倒を通して折口が音声の重視と広範な比較への視野という能力を獲得したとされる。そして，このような言語学の嗜みがあったからこそ，折口は柳田との出会いに導かれたという(38)。折口に朝鮮語を教えた金沢庄三郎の影響については，伊藤好英がいち早く関心を示している(39)。

さらに，折口が受けた言語学の影響を思想的に追究したのが 2002 年に『群像』にて掲載された「神々の闘争 折口信夫論」をはじめとする安藤礼二による論考であり，氏によれば語根に焦点を当てる折口の言語観は先に触れた一元論哲学とも通底するとされる(40)。

3-2-3　キリスト教

敗戦後の数年間に渡って折口信夫は神道が普遍的な宗教に変革しなければならないという「神道宗教化論」を説いており，その中にはキリスト教の影響が大きく見られる。この経緯については 2003 年以前にあまり論じられてこず，特に折口とキリスト教の接近は第二次世界大戦以降のことと考えられていた(41)。しかし，藤無染をめぐる先の安藤の論考に基づけば，学生時代に折口がキリスト教の影響を受けていることが理解できる。すなわち，「神道宗教化論」のキリスト教的要素は戦前から連続するものとして捉えられうるのである。折口学へのキリスト教の影響はとりわけ「内部」においてタブー視されてきたとされるが，安藤の研究を受けた現在がまさに議論を進める機運の高まっている時期だといえよう(42)。

このほか学問形成期の折口への影響については，鈴木貞美，松本博明，持田叙子らが同時代の人物との連関を読み解いている。特に近代文学の観点から折口のテクストを研究する

松本は，折口の語彙や世界観が発見・方法化されたダイナミズムを探り出している(43)。

3-3　特徴③：折口学の国際性

以上のように，折口信夫は学生時代から西洋の学問を中心とした世界の思想に触れていた。そしてその影響が，「古代」に焦点を置いており一見国内に閉じた印象を与える折口学の中にも窺える。これはつまり，折口学が近代世界の学問と広く通じ合うものであるということであり，その学知が「詩人の直観」とも称された折口の学問の妥当性を説明する根拠となるだろう。世界視野で折口学を考える議論としては，その他に次のものが挙げられる。

近代西洋思想のうち民俗学を志して以後の折口に大きな影響を与えたものとして，デュルケムに代表されるフランス社会学年報学派の民族学がある。当時は西欧への留学生を介して学問的業績が日本へ伝わっており，折口もまたそこから研究成果を吸収していた。安藤礼二は，ここに折口学が「民俗論理」ではなく「民族論理」を標榜した理由を見ている(44)。

また，折口学の起源は近代のアジアにも求められている。その一例として，安藤は台湾の原住民について記しており，折口自身が読み込んだことを証言する『蕃族調査報告書』を先述の「神々の闘争 折口信夫論」で初めて本格的に取り上げ，折口学の根底を支える「ホカヒビト」論への影響を指摘している(45)。先の 3-1 で触れた，折口学をアジア研究の中から検証する伊藤好英や辰巳正明の研究も同様に国際性を視野に入れているといえる。

折口学は当時の日本だけでなく，近現代の西洋・アジアも含めたグローバルな視野のもとでその妥当性を推し量る必要がある。先の 3-1，3-2 にも通じることだが昨今における折口の学問に対する認識は，国文学や（日本）民俗学といった分野に象徴されるように日本国内に焦点を当てた従来の「閉じた折口学」から，民族学をはじめとして西洋・アジアというように国際性を射程に入れた「開かれた折口学」へと変貌を遂げつつあるといえよう(46)。

3-4　特徴④：別の枠組みから折口学を見直す

多分野にわたる学績を残した折口信夫は，これまで「国文学者」・「民俗学者」として認識されることが多かった。しかし先の「折口名彙」同様，こうした一定の観点から眺めた場合，折口学の理解は限定的なものとなる。それに対して，外部の研究者からは折口信夫を他の分野の学者として描き出すことが試みられている。折口学・折口研究の枠組みを問い直す契機が生まれつつあるのである。以下では「神道学」・「宗教学」に焦点を当てて議論を追う。

3-4-1　折口学と神道学

神話学者の斎藤英喜は 2019 年の著書『折口信夫 神性を拡張する復活の喜び』にて，これまでの神道史研究の中で折口信夫が論じられてこなかったことに注目し，折口を「神道学者」として捉えつつ，同時代の神道家・神道学者たちとの関係の中から折口学を理解することを試みている。斎藤によれば，折口は国家によって管理・支配される近代神道のあり方に異議申し立てを行った人物であるとされる(47)。また，同じく折口を神道学の文脈で捉える神道学者の阪本是丸も，当時の時代背景や他の神道学者との関係を含んだ，「国学とは何か」という問題設定を踏まえながら彼の神道・国学論を理解する必要性を説いている(48)。

さらに，このように「神道史」の視点に立つ斎藤の研究において特徴的なのは，その射程

が中世の神道説の世界にまで遡ることである。日本中世には『日本書紀』をはじめとした古代以来の神話を当時の文脈に即して読み替える「中世日本紀」・「中世神話」という運動があったが，これが近代の折口学にまで通じるとされるのである(49)。ここからは折口学を，「「学問」という手法によって，読み替えられ，再創造された，近代の「神話」として読み直す」可能性が開かれる(50)。この視点は，「折口名彙」等の語彙を考える上でも重要であろう。

3-4-2　折口学と宗教学

先の 3-2-2 で示した折口学に対する言語学の影響，また 3-3 で見たフランス社会学年報学派による研究成果の受容は，折口学と宗教学の繋がりを示唆する。安藤礼二は意味の「種子」たる「語根」を「霊魂」に相当するものとして捉えた折口の「言語学」を，「宗教学」に等しいものと見ている(51)。さらに，安藤によれば折口は近代の宗教学的知識をいち早く会得しており，彼の民俗学の起源には「比較宗教学的な，複眼的な思考方法」が不可欠であったとされる(52)。折口学の発想は，比較を基盤とした草創期の宗教学に大きく通じるのである。この性質が結実した例としては，折口が戦後に唱えた「既存者」についての議論と R・ペッタッツォーニの「最高存在論」との親和性が，安藤や江川純一によって指摘されている(53)。

3-5　新資料の発見・解読

なお，上記のように折口研究において近年議論が活発に進んでいることは，新資料の発見・解読と不可分である。例えば安藤礼二は，学生時代に所属していた神風会での折口の演説が記された雑誌資料等を紹介している(54)。こうした新資料は，3-2 で扱ったような柳田以前の折口の動向を把握することに大きく寄与しているといえよう。また，折口の授業を受講していた学生によるノートがかねてより翻刻されており，現在もこの作業は伊藤高雄らによって継続的に行われている(55)。加えて，門下の池田彌三郎が書き留めた芸能史講義のノートも発刊されている(56)。さらに，國學院大学の折口博士古代研究所には折口信夫の自筆原稿が所蔵されおり，松本博明が近代文学研究の立場から解読を行っている(57)。

ところで，折口学への手がかりは生前のテクスト以外にもある。弟子による伝記もまた研究を進める上での重要な要因となるのである。折口信夫の没後，門弟の池田彌三郎，加藤守雄，岡野弘彦らによって本人の生前の姿が明らかにされていたが(58)，近年では折口門下の面々が鬼籍に入りつつある中で，「最後の弟子」を自負する岡野が折口像を描写した『最後の弟子が語る折口信夫』を著している(59)。

4.　折口学の「未来性」

今，なぜ折口信夫を読み直す必要があるのだろうか。本章では折口学がもつ性質に焦点を当てながら，その中の何が注目を集めているのかを記述したい。

折口信夫にはこれまで周期的に，国文学・民俗学等の分野に属さない専門外の人間から見直される機運があった。斎藤英喜によれば国文学プロパーの外では，まず 1960 年代後半～70 年代に戦後民主主義批判の流れの中で，次に 80 年代～90 年代にポストモダンの風潮の中で，そして 2000 年以降はグローバルな世界思想の文脈で折口が注目されているとされる。

氏によれば,「時代の変転のなか，つねに最先端の思想や知との格闘のなかで,「折口信夫」は更新し，読みなおされている」という(60)。折口学の読み直しは，時代への応答という実践的意義を有するものなのである。

特に注目したいのは，村井紀も指摘する通り 1960 年代末においてアカデミズムや大学のあり方が問われる中で，折口信夫は柳田國男・日本民俗学とともに関心がもたれたということである(61)。このことは，近年の折口学への関心にも通じる部分が大きいのではないだろうか。というのも，当今においても大学制度やアカデミズムの危機を憂える声が大きくなっているからである。特に，折口研究の先導者として活躍している安藤礼二が批評というアカデミズムの外野から議論を行ってきたこともまた，その兆候を象徴的に示すものではないかと思われる。さらに視野を広げるなら，折口学への注目の高まりは近代的な国民国家制度，資本主義システムの限界という大きな世界情勢の流れとも呼応しているだろう。

なお，折口学を読み直す可能性を表す言葉としては，中沢新一の著書『古代から来た未来人 折口信夫』のタイトルが奇しくも示している,「未来性」の語が適切であろう(62)。安藤礼二や植村和秀ら思想系の研究者はまさにこの点に注目する(63)。

4-1　学問の細分化・実証主義批判をめぐって

人文学では学問の専門化による細分化が問題視されて久しいが，これとは対照的に民俗学・国文学・芸能史をはじめとして多分野を横断的に論じている折口学の越境性が，現状を打開する可能性として注目を集めている。例えば,「折口は学問細分化の時代に，頑固にそれに抵抗した学者なのである」と説く上野誠は，折口信夫の学問を参照しながら過度の実証主義ゆえに行き詰まりを見せている『万葉集』研究の方法を模索している(64)。民俗学の分野では新谷尚紀が，昨今においてなおざりにされつつある柳田國男や折口信夫の学問を見直し，その射程や比較研究法を学ぶとともに改良すべき旨を指摘している(65)。

折口学にとっての最も致命的な難点とは実証性の欠如であるが，まさに細分化の進展に伴い実証主義的研究が行き詰まりを見せている今日の研究においてこそ，実証性や近代的合理性では到達できない地平を開拓した折口の学績を見直す機運が高まっているといえよう。安藤礼二は，研究者である上に創作者であるという二面性をもった折口が客観的な学問に対して主観性を取り込んでいった点に，来るべき人文諸科学のモデルを見出している(66)。

4-2　権力をめぐって

折口信夫を評する者の間では，彼が国家権力から自由だったことを重視する見方が強い。特に，国家神道や戦争をめぐり主流の議論に異を唱えた「抵抗」の逸話が注目されている。

こうした見方に特徴的なのが，折口信夫を「弱者」もしくは「反・脱権力的」存在として描き出す点である。例えば，政治思想史研究の石川公彌子は折口を，人間の弱さを肯定しながら「道念」を核とする親密圏を構築しようとした「近代国学」者として描き出し，民主主義確立・発展の可能性を見ている(67)。また，上野誠は国学者としての「疎外者意識」に着目し，折口を傍流・周縁・後進に自己を定位する存在として位置づけている(68)。さらに，安藤礼二は折口を「「国家」に抗」し,「「国家」を解体する」作家と評している(69)。

一方で，折口信夫に「強さ」や権力性を見出そうとする考え方もまた存在する。この姿勢

が特に顕著なのは，折口が戦時期の国家体制に加担したと考え，彼の戦争責任を追及した村井紀の議論である(70)。阪本是丸も折口が国家神道体制の中枢に深く関わり，体制を批判するよりもむしろ「もう一つの国家神道」を構築しようとしたのではないかと論じている(71)。

上記は主に折口自身についての評価だが，折口学も権力の問題と深く結びついている。例えば安藤によれば，折口は社会学年報学派を通してフランスの民族学から最先端の権力理論を吸収していたとされる(72)。また安藤も注目する通り，折口学の焦点は「ミコトモチ」（天皇）と「ホカヒビト」（芸能者・乞食），及び両者の相補関係に向けられている(73)。

このような両面性は先の戦争責任への評価についても同様に見られるものだが，折口信夫・折口学が単純な「体制／反体制」ないし「権力／反・脱権力」という枠組みをもってしては読み解くことができないということを意味するのではないだろうか(74)。

4-3　善悪の彼岸をめぐって

折口の思想がもつ大きな魅力の 1 つは，通俗的な善悪観や道徳観を逸脱していることである。こうした「善悪の彼岸」を眼差す視点が思想系の研究者に注目されている。

例えば，木村純二は「いきどほり」の語に注目して折口思想を読み解き，善悪や美醜という人間の価値基準を超えて大きな怒りのエネルギーを発揮する神への折口の志向を描き出している(75)。また，安藤礼二は折口の表現が善悪の基準を超えて極めてラディカルかつアクチュアルな言葉を紡ぐ点に着目し，危険と表裏一体な表現の可能性を模索している(76)。

ところで，これに関連して思想方面での他の議論についても付記しておくと，折口学のもつ「霊性」に注目しつつ，近年哲学分野で脚光を浴びている霊性をめぐる潮流との親和性を指摘した林浩平の議論も重要である(77)。霊性の議論は，先の「一元論哲学」（安藤礼二）や「中世日本紀」・「中世神話」（斎藤英喜）にも通ずる。その他には，古代ギリシアに通じる「悲劇精神」との親和性を見る関口浩，また「贈与」に注目した岩野卓司の論考がある(78)。

4-4　宗教学関連

ところで，宗教学周辺での折口学への関心についてはどうであろうか。既に見た通り，安藤礼二・斎藤英喜によって専門的な研究が行われ，『現代思想』等の雑誌でも宗教学者による論考が掲載されているが，特にここ数年だけ見ても折口学は再度脚光を浴びている(79)。

例えば，2019 年の大嘗祭をめぐっては著名な論考「大嘗祭の本義」との関連から折口学が取り上げられた(80)。これは天皇制や国家の動きと折口学への注目が不可分であることを示す一例といえよう。また 2021 年末から 2022 年始にかけては，東京自由大学主催の島薗進ゼミ「折口信夫の宗教思想 新たな地平を求めて」（全 3 回）が開催されている。近年の講演で折口が話題に上ることは他にもあり，2019 年の國學院大学研究開発推進機構公開学術講演会における阪本是丸の「折口信夫と神道・国学 『異訳国学ひとり案内』から『神やぶれたまふ』まで」や，2020 年の神道宗教学会主催のシンポジウム「戦後神道と学問」における津城寛文の「折口信夫戦後神道論の布置」等が存在する。特に島薗や津城はかねて折口を研究対象としており，現在は再注目の機運が高まりつつある時期だといえる(81)。

5. 総括

3・4 章にわたって 2003 年以後の折口研究を大まかに辿ってきたが，近年では折口門下の学統を継ぐ研究者にとどまらず，多彩な分野を交えながらこれまでにない新たな視点や枠組みで折口が理解・再評価されていることがわかる。世界視野で分野横断的な「開かれた折口学」へと注目が寄せられているのである。これは大学や社会の趨勢とも対応している。

折口学の評価をめぐっては研究者・批評家の間で多岐にわたる見方がなされており，一部については正反対といってもいいような議論がなされている。これには一因として，村井紀がかねて指摘したような「私の折口信夫」観が関わっているだろう。というのも，折口信夫を論じる者は往々にして自分の見たいと思う折口像に視野を限定してしまい，共同の認識へと議論が開かれなくなる危険に陥りかねないのである(82)。このことはおそらくあらゆる概念や理論を論じる場合にも当てはまることであろうが，折口においてはそれが特に顕著であると筆者は考える。なぜなら，折口信夫自身が強烈な解釈的欲望を抱えており，斎藤英喜が「中世神話」概念にてその学を捉えたように，古典のテクストに対して自分自身を読み込んでいった人物だからである。そして，その引力ゆえに人は折口学に幻惑される。

折口学の妥当性を検証する際には，こうした折口信夫自身における主観の構造，あるいは実存を無視して議論を進めることはもはやできないだろう。だとすれば，かつて池田彌三郎が説いたような，折口学は「その全体をまず認めてかかるか，全体を認めないか」であるとする立ち位置から一歩引き下がり，折口信夫を肯定するのでもなく否定するのでもない「第三の道」を模索することが求められるはずだ。特定の宗教や信仰を絶対視することを控え，各人の規範的関心に対して自覚的になることが要求される宗教学には，それを目指すことが可能なのではないだろうか(83)。

註

(1) 本稿にて「折口学」という言葉をどのような意味で用いているかについて付言しておく。ここでは「折口学」は，「折口信夫による学問の体系」という意味で使用する。また，折口学についての研究は「折口研究」という語で表す。折口信夫の学問に関する研究の中には，門下の学統を継ぐ折口研究や折口学を発展させた研究のことを「折口学」と呼ぶ場合も存在する（安藤礼二・富岡多惠子『折口信夫の青春』ぷねうま舎，2013 年，175 頁〔安藤発言〕，松本博明『折口信夫の生成』おうふう，2015 年，229 頁など）。本稿の語法と混同することがないよう注意されたい。

(2) 西村享・高梨一美「折口学への道」，西村享編『折口信夫事典 増補版』大修館書店，1998 年，4 頁。

(3) 西村・高梨，前掲書，4-6 頁。

(4) 折口信夫『折口信夫全集 3』折口信夫全集刊行会編，中央公論社，1995 年，470 頁。

(5) ①「没後五十年 特集 折口信夫（釋迢空）」（『三田文学』〔第 3 期〕第 82 号（75），三田文学会，2003 年），②「特集 折口信夫歿後五十年」（『新潮』第 100 号（10），新潮社，2003 年），③「特集 國學院大學における「三矢重松博士八十年祭 折口信夫博士

五十年祭」記念講演会)」(『すばる』第 26 号（2）集英社，2004 年）など。

(6) 本講演の内容は書籍化されている。國學院大学折口博士記念古代研究所・小川直之編『折口信夫・釋迢空 その人と学問』おうふう，2005 年。

(7) 有山大五・石内徹・馬渡憲三郎編『迢空・折口信夫事典』勉誠出版，2000 年。

(8) 上野誠『折口信夫 魂の古代学』角川ソフィア文庫，2014 年，34 頁。

(9) 池田彌三郎『私説 折口信夫』中公新書，1972 年，241 頁。

(10) 池田，前掲書，226 頁。「折口生前から折口につきつけられた批評では，折口の言説はなんの証拠もなく，冷厳な科学的な説とは受け取られないという批評がもっとも多い。それは「飛躍」していて，詩人の空想ではあっても，学問ではない，というのである」

(11) 比較的近年の批判としては，実証的観点から折口学に再検討をほどこした諏訪春雄『折口信夫を読み直す』（講談社現代新書，1994 年）や，折口信夫の戦争責任を追及した村井紀『反折口信夫論』（作品社，2004 年）がある。

(12) 上野『魂の古代学』32 頁。

(13) 池田，前掲書，240-241 頁。

(14) 安藤・富岡，前掲書，174-175 頁。

(15) 村井紀「「全貌」という虚構 池田彌三郎への疑問」,『反折口信夫論』作品社，2004 年，246-249 頁，吉田文憲・兵藤裕己・伊藤好英「〔座談〕 折口信夫を読む」，伊藤好英『折口信夫 民俗学の場所』勉誠出版，2016 年，185 頁〔吉田発言〕。

(16) 池田，前掲書，18-21 頁。

(17) 西村享編『折口信夫事典』大修館書店，1988 年。本稿では 1998 年の増補版を参照。

(18) 西村編，前掲書，8 頁。

(19) 松本，前掲書，229 頁。

(20) 「まれびと」概念については，安藤礼二『神々の闘争 折口信夫論』（講談社，2004 年，11 頁），木村純二『折口信夫 いきどほる心』（講談社学術文庫，2016 年，92-91 頁）で言及されている。

(21) 小川直之「折口博士記念古代研究所の現在」,『年刊藝能』第 24 号，2018 年，28 頁。

(22) 安藤礼二は富岡多惠子との対談の中で「外部」者による視点の重要性を指摘している（安藤・富岡，前掲書，175 頁〔安藤発言〕）。

(23) 上野誠『折口信夫的思考 越境する民俗学者』青土社，2018 年，354 頁。本箇所では「第三世代」の研究者として，保坂達雄・伊藤好英・安藤礼二・小川直之・辰巳正明・阪本是丸・持田叙子が挙げられている。

(24) なお，本稿の対象範囲以前における折口研究をまとめた主な論文としては，①長谷川政春「素描・折口学の現在」,『國學院雑誌』第 92 号（1），1991 年，668-681 頁，②石内徹「折口信夫（釈 迢空）」，有精堂編集部編『日本文学研究の現状 Ⅱ近代』有精堂出版，1992 年，241-246 頁，③高橋広満「折口信夫研究の現在」,『国文学 解釈と教材の研究』第 42 号（1），1997 年，110-115 頁，④持田叙子「折口信夫論の現況」,『国文学 解釈と鑑賞』第 72 号（12），2007 年，135-142 頁がある。

(25) 折口の語彙については，國學院大学の伝承文学コースで小川直之が開講する演習の成

果が，『折口学における述語形成と理論』として発刊されている（「小川研究室」，http://www2.kokugakuin.ac.jp/~ogawana/on/term.htm，2022/01/31 最終アクセス）。

(26) 伊藤好英『折口学が読み解く韓国芸能』慶応大学出版会，2006 年，同『民俗学の場所』。

(27) 保坂達雄『神話の生成と折口学の射程』岩田書院，2014 年。

(28) 辰巳正明『折口信夫 東アジア文化と日本学の成立』笠間書院，2007 年。

(29) 伊藤『民俗学の場所』15-23, 267 頁。

(30) 折口，前掲書，465-467 頁。

(31) 保坂達雄「新しい折口信夫へ」，『国文学』第 51 号（10），2006 年。本稿ではこれを所収した同『古代学の風景 折口信夫・琉球・日本』岩田書院，2015 年，58 頁を参照。

(32) 安藤礼二『折口信夫』講談社，2014 年，27 頁。

(33) 富岡多惠子『釋迢空ノート』岩波書店，2000 年。

(34) 安藤礼二「第一章 起源」，『折口信夫』，同「身毒丸変幻 折口信夫の「同性愛」」，『光の曼陀羅 日本文学論』講談社学術文庫，2016 年，木村「第四章 罪，恋，そして死」，前掲書，保坂達雄「折口信夫と新仏教家藤無染」，『神話の生成』など。

(35) 安藤『神々の闘争』72-75 頁。

(36) 安藤「第一章 起源」，『折口信夫』。

(37) 折口，前掲書，479 頁。

(38) 保坂『古代学の風景』68-69 頁。

(39) 伊藤「Ⅱ 折口学と韓国」，『韓国芸能』。

(40) 安藤礼二「神々の闘争 折口信夫論」，『群像』第 57 号（7），2002 年，190-220 頁。同『神々の闘争』に第一・二章として所収。

(41) 岡野弘彦・安藤礼二・林浩平「これからの折口信夫／折口再生 そのアクチュアリティ」，『國文學』第 51 号（10），2006 年，8 頁〔安藤発言〕。

(42) 安藤・富岡，前掲書，176 頁。

(43) 鈴木貞美『『死者の書』の謎 折口信夫とその時代』作品社，2017 年，松本，前掲書，持田叙子『歌の子詩の子，折口信夫』幻戯書房，2016 年など。

(44) 安藤「第六章 天皇」，『折口信夫』274 頁。なお，ヴントの民族心理学から折口の学問形成を考える必要を説く議論もある（伊藤高雄「折口信夫の国文学発生論 「異族」とまれびとをめぐって」，『國學院雑誌』第 103 号（11），2002 年，72-73 頁）。

(45) 安藤『神々の闘争』所収。なお，安藤の理解については重大な事実誤認や誤解があることを関口浩が指摘している（「折口信夫と台湾原住民研究」，『成蹊大学一般研究報告』第 43 号，2010 年，3 頁）。

(46) 安藤『折口信夫』287 頁にこの姿勢が顕著に示されている。

(47) 斎藤英喜『折口信夫 神性を拡張する復活の喜び』ミネルヴァ書房，2019 年，ii-iv, 8-10 頁。

(48) 阪本是丸「折口信夫と神道・国学」，『國學院大學研究開発推進機構紀要』第 12 号，2020 年，158 頁。

(49) 斎藤，前掲書，10 頁。

(50) 斎藤，前掲書，14 頁。

(51) 安藤『神々の闘争』94-95 頁。
(52) 安藤『光の曼陀羅』481 頁。
(53) 安藤「第七章 神」,『折口信夫』, 江川純一「折口信夫における宗教学的思考 ライフ・インデクス論と最高存在論」,『現代思想 総特集 折口信夫』第 42 号（7), 青土社, 2014 年, 282-293 頁。
(54) 安藤『折口信夫』55-57 頁。
(55) 伊藤高雄「「大嘗祭の本義」(小池元男ノート) 昭和三年 折口信夫(下)」,『武蔵野大学日本文学研究所紀要』第 9 号, 2021 年, 79-96 頁, 同「折口信夫・昭和四年 郷土研究会講義 小池元男ノート」,『伝承文化研究』第 18 号, 2021 年, 140-158 頁など。
(56) 池田彌三郎『折口信夫芸能史講義 戦後篇上・下 池田彌三郎ノート』伊藤好英・藤原茂樹・池田光編, 慶應義塾大学出版会, 2015-16 年。
(57) その成果としては, 前掲の『折口信夫の生成』(2015) など。
(58) 池田彌三郎『まれびとの座 折口信夫と私』中央公論社, 1961 年, 加藤守雄『わが師折口信夫』文藝春秋, 1967 年, 岡野弘彦『折口信夫の晩年』中央公論社, 1969 年等。
(59) 岡野弘彦『最後の弟子が語る折口信夫』平凡社, 2019 年。なお 2018 年から 2019 年にかけて, 慶應義塾大学出版会から岡野を編者としたアンソロジー『精選 折口信夫』（全 6 巻）が刊行されている。
(60) 斎藤英喜「折口信夫の可能性へ　たゝり・アマテラス・既存者をめぐって」,『愛知県立大学説林』第 65 号, 2017 年, 103 頁。
(61) 村井, 前掲書, 8 頁。
(62) 中沢新一『古代から来た未来人 折口信夫』ちくまプリマー新書, 2008 年。
(63) 折口学が未来性をもつとする指摘は, 例えば以下のものがある。①「だからこそ折口学は, 未来の学になると思うのです。そしてそれは疑いもなく, 表現の学としてもある」(安藤『光の曼陀羅』330 頁), ②「折口の思想は, 社会の未来のために参照する価値が高い」(植村和秀『折口信夫 日本の保守主義者』中公新書, 2017 年, 219 頁), ③「折口学はあと五十年, 百年, もうそれ以上, 未来性をもって論じられる人だから」（安藤・岡野・林, 前掲書, 10 頁〔岡野発言〕)。これとは対照的に, 折口が語る「未来」という言葉の空疎さを指摘する見解もある (松浦寿輝「補論 不在の殻」,『増補 折口信夫論』ちくま学芸文庫, 2008 年)。
(64) 上野『魂の古代学』150 頁, 同『折口信夫的思考』。
(65) 新谷尚紀『民俗学とは何か 柳田･折口･渋沢に学び直す』吉川弘文館, 2011 年, 20 頁。
(66) 安藤『光の曼陀羅』328-330 頁。
(67) 石川公彌子『＜弱さ＞と＜抵抗＞の近代国学 戦時下の柳田國男, 保田與重郎, 折口信夫』講談社メチエ, 2009 年, 9, 212-213, 220 頁。
(68) 上野誠「折口信夫の自己定位」, 國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『近代の神道と社会』弘文堂, 2020 年。
(69) 安藤『神々の闘争』5 頁。
(70) 村井「序説 反折口信夫論」, 前掲書。
(71) 阪本是丸「折口信夫の戦争歌と国家神道 神・天皇・民族の戦ひ」,『國學院大學研究開

発推進センター研究紀要』第 8 号，2014 年，6 頁。

(72) 安藤『折口信夫』287 頁。

(73) 安藤『神々の闘争』5 頁。

(74) なお，4 章冒頭で触れた大学制度・アカデミズムの議論とこれを合わせて考えた場合，姉崎正治，柳田國男，折口信夫を論じた柳川啓一「Ⅳ 官の科学・野の科学」(『祭と儀礼の宗教学』筑摩書房，1987 年）が姉崎の学問を「官の科学」，柳田の学問を「野の科学」と位置づけたことが思い起こされる。大学に所属しつつも民俗学を深めた折口の学問はこのどちらにも属しておらず，あえて表現を与えるならば「非官非野」と称することができるだろう。比較を基礎とし抜群の類比能力を携えた折口学は，大学内外の境界をもゲリラ的に解体する可能性をもつと考えられようか。

(75) 木村，前掲書，23, 65-66, 69 頁。

(76) 安藤『神々の闘争』214 頁。

(77) 林浩平『折口信夫 霊性の思索者』平凡社新書，2009 年，44 頁。

(78) 関口浩「古代日本における《悲劇精神》について 折口信夫の思索を参照して」,『文明と哲学』第 9 号，2017 年，49-60 頁，岩野卓司「戦後の折口信夫の「神学」が示唆する贈与の次元」,『明治大学教養論集』第 547 号，2020 年，107-119 頁。

(79) 2003 年より後に折口関連で開催された主な雑誌の特集やイベントを簡略に示す。【雑誌】①「特集 折口信夫 新しく見えてきた像」(『國文學』，2006 年)，②「折口信夫と柳田國男」(『国文学 解釈と鑑賞』，2007 年)，③「特集 折口学の可能性を拓く」(『國學院雑誌』，2013 年)，④「総特集 折口信夫」(『現代思想』，2014 年)，⑤「'13 年折口信夫没後 60 年・芸能学会発足 70 年記念大会」(『年刊藝能』，2014 年)，⑥「特集 折口信夫」(『三田文学』，2014 年)，⑦「折口信夫生誕一三〇年記念号」(『年刊藝能』，2018 年)。【イベント】⑧「生誕一二〇年記念 折口信夫の世界 その文学と学問」(渋谷区郷土博物館・文学館，2006 年，川本喜八郎監督による人形アニメーション「死者の書」が上映)，⑨生誕 130 年記念 特集展示「折口信夫と『死者の書』」(國學院大学博物館，2016 年，近藤ようこが漫画化した『死者の書』とのタイアップ)。

(80) 塩川哲朗「「真床襲衾」をめぐる折口信夫大嘗祭論とその受容に関する諸問題」,『國學院大学校史・学術資産研究』第 11 号，2019 年，45-100 頁，平藤喜久子「神話学と大嘗祭 神話儀礼論の系譜」,『神道宗教』第 254・255 号，2019 年，319-348 頁など。

(81) 2003 年以前の論考としては，島薗進「折口信夫における「民族論理」論の形成」東京大学大学院宗教学研究室修士論文（未公刊)，1973 年，津城寛文『折口信夫の鎮魂論 研究史的位相と歌人の身体感覚』春秋社，1990 年。

(82) 村井「「全貌」という虚構 池田彌三郎への疑問」，前掲書，236-242 頁。

(83) その草分けをなすものが,「たんなる折口擁護でも折口否定でもない第三の道を，さしずめ踏み分け道の始まりであるかのようにほんの一歩なりとも歩き始めてみたかった」と記す，中村生雄『折口信夫の戦後天皇論』(法蔵館，1995 年）である（法蔵館文庫，2020 年，343 頁)。

参考文献

安藤礼二『神々の闘争 折口信夫論』講談社，2004 年。
――――『折口信夫』講談社，2014 年。
――――『光の曼陀羅 日本文学論』講談社学術文庫，2016 年。
安藤礼二・岡野弘彦・林浩平「座談会 これからの折口信夫／折口再生 そのアクチュアリティ」，『國文學』第 51 号(10)，2006 年，6-43 頁。
安藤礼二・富岡多惠子『折口信夫の青春』ぷねうま舎，2013 年。
池田彌三郎『私説 折口信夫』中公新書，1972 年。
石川公彌子『＜弱さ＞と＜抵抗＞の近代国学 戦時下の柳田國男，保田與重郎，折口信夫』講談社メチエ，2009 年。
伊藤高雄「折口信夫の国文学発生論 「異族」とまれびとをめぐって」，『國學院雑誌』第 103 号（11），2002 年，61-78 頁。
伊藤好英『折口学が読み解く韓国芸能』慶応大学出版会，2006 年。
――――『折口信夫 民俗学の場所』勉誠出版，2016 年。
上野誠『折口信夫 魂の古代学』角川ソフィア文庫，2014 年。
―――『折口信夫的思考 越境する民俗学者』青土社，2018 年。
―――「折口信夫の自己定位」，國學院大學研究開発推進センター編・阪本是丸責任編集『近代の神道と社会』弘文堂，2020 年，715-740 頁。
植村和秀『折口信夫 日本の保守主義者』中公新書，2017 年。
江川純一「折口信夫における宗教学的思考 ライフ・インデクス論と最高存在論」，『現代思想 総特集 折口信夫』第 42 号（7），青土社，2014 年，282-293 頁。
小川直之「折口博士記念古代研究所の現在」，『年刊藝能』第 24 号，2018 年，27-48 頁。
折口信夫『折口信夫全集 3』折口信夫全集刊行会編，中央公論社，1995 年。
木村純二『折口信夫 いきどほる心』講談社学術文庫，2016 年。
斎藤英喜「折口信夫の可能性へ たゝり・アマテラス・既存者をめぐって」，『愛知県立大学説林』第 65 号，2017 年，103-118 頁。
――――『折口信夫 神性を拡張する復活の喜び』ミネルヴァ書房，2019 年。
阪本是丸「折口信夫の戦争歌と国家神道 神・天皇・民族の戦ひ」，『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第 8 号，2014 年，1-54 頁。
――――「折口信夫と神道・国学」，『國學院大學研究開発推進機構紀要』第 12 号，2020 年，145-158 頁。
新谷尚紀『民俗学とは何か 柳田・折口・渋沢に学び直す』吉川弘文館，2011 年。
関口浩「折口信夫と台湾原住民研究」，『成蹊大学一般研究報告』第 43 号，2010 年，1-29 頁。
辰巳正明『折口信夫 東アジア文化と日本学の成立』笠間書院，2007 年。
中村生雄『折口信夫の戦後天皇論』法蔵館文庫，2020 年。
西村亨編『折口信夫事典 増補版』大修館書店，1998 年。
林浩平『折口信夫 霊性の思索者』平凡社新書，2009 年。
保坂達雄『神話の生成と折口学の射程』岩田書院，2014 年。

――――『古代学の風景 折口信夫・琉球・日本』岩田書院，2015 年。
松浦寿輝『増補 折口信夫論』ちくま学芸文庫，2008 年。
松本博明『折口信夫の生成』おうふう，2015 年。
村井紀『反折口信夫論』作品社，2004 年。
持田叙子「折口信夫論の現況」,『国文学 解釈と鑑賞』第 72 号（12），2007 年，135-142 頁。
「小川研究室」，http://www2.kokugakuin.ac.jp/~ogawana/on/term.htm，2022/01/31 最終アクセス。